<安房地域母親大会のあゆみ>

1954 年、ビキニ環礁におけるアメリカの水爆実験により日本のマグロ漁船「第 5 福竜丸」が被爆しました。核戦争の再来を恐れた日本の女性たちは、世界中の女性たちに「原水爆禁止のための訴え」を送りました。これを受け、1955 年 7 月にスイスのローザンヌで世界母親大会が開催されました。そのアピール文には、「女性であり母親である私たち数億の者は、平和を欲しています。私たちこそ、生命と幸福と進歩の力なのです。戦争を準備する者たちは、母親に意見を尋ねません。だからこそ私たちは、私たちの声を挙げねばなりません」と記されています。この大会で、「生命を生み出す母親は 生命を育て 生命を守ることを望みます」というスローガンが生まれ、現在に引き継がれています。

この世界母親大会に日本の代表として草の根の母親たちを送ろうと、平塚らいてう、羽仁説子、丸岡秀子らの呼びかけで、1955 年 6 月 7 日に第 1 回日本母親大会が開かれ、2,000 人が集まりました。当時の歴史背景をひも解いてみると、1950 年に朝鮮戦争勃発、1952 年にサンフランシスコ講和条約と日米安保条約の発効、1954 年に自衛隊法成立‥と続きます。不戦・平和・独立の日本を築くことは多くの国民の願いでしたが、戦後の日本は危険な曲がり角にあったのです。

日本婦人団体連合会の初代会長・平塚らいてうは「思想・信条・人種の別なく、核戦争の危険から子供の命を守る母親の大会を」と訴え、日本母親大会は各地に広がっていきました。

安房地域では、湾岸戦争の早期終結を祈念して「平和を願う春のコンサート」を 1991 年に開催し、幅広い女性の交流を図りました。日本でもその頃は、同年にペルシャ湾への機雷掃海艇派遣、1992 年に国際平和協力法（PKO 法）成立など、自衛隊の海外派遣が問題となった時期でした。安房の女性たちも、平和をもたらす文化での世論作りを目ざしたのです。

この経験を活かして、1995 年 5 月から母親大会の開催に向けて準備を始めました。「この間に学んできたことは、主権者は私たちという憲法の精神です。戦後 50 年、被爆体験 50 年、そして婦人参政権 50 年という節目の年にあたり、母親大会は皆の願いの一致点で行動します。思想・信条は様々でも、平和で誰もが住みよい安房地域にするために、共同の話し合いの場所を作り出していきましょう」と、広く呼びかけました。

こうして、1996 年 1 月 28 日に第 1 回安房地域母親大会を開催しました。初代の実行委員長は、婦人保護長期入所施設「かにた婦人の村」の天羽道子さんにお引き受けいただきました。以降、自主的な企画・運営で次頁別表のように 30 年継続してきました。「母親」とは、母性を持つ全てのひとを対象とした呼び方で、実行委員会・参加者ともに性別・年齢を問いません。構成団体は、国連 NGO 新日本婦人の会館山支部、国連 NGO 新日本婦人の会鴨川ひまわり班、国連 NGO 新日本婦人の会鋸南やまゆり班、市町村職員連絡協議会安房地域女性連絡会、全日本年金者組合安房支部、NPO 法人安房文化遺産フォーラムです。

母親大会は話し合いの広場であり、地域で活躍する多分野の方々と協力の輪を築いてきたことは、大きな財産といえます。お互いの力で支え合い、子ども達を伸び伸びと育てるために、平和で住み良い地域にしていきたいと考え、安房地域（館山市・南房総市・鴨川市・鋸南町）での開催にこだわってきました。2005 年から続けている「房州弁で憲法を」のコーナーは、笑いを交えて憲法を再認識する名物場面となっています。今後も安房地域ならではの視点を大切にしながら、次世代に継承していきたいと願っています。

（齊藤 陽子）